

もう四半世紀前のことで、どうも記憶がはっきりしないのだが、おそらく、博士論文の主要部分にした論文を書き終えたころだろうと思う。数学の院生だった私は、段々と自分の研究に物足りなさを覚えるようになった。

高校生のときにゲーデルの不完全性定理の解説本を手にして以来、数理論理学、数学基礎論にのめり込み、受験勉強もほったらかして、数理論理学の勉強と研究に明け暮れ、そのころには、すでに数編の論文を書いて、駆け出しながら、一人前の数学者になっていた。

しかし、そうなってみると全然面白くない。数学では、私が知りたかったことが全然わからない。まあ、何が知りたかったのか、ようやく分かったのは五十歳に近くなってきたことから、そのころは、なんとなく不満だっただけなのだけれど、とにかく面白くない。

昼食を何にするかは延々と悩む割に、人生を左右するような思い切ったことを、エイヤッとやってしまう性格なので、親の猛反対を押し切って始めた数学研究を、あっさり止めて、以前から好きだった数学史をやることにした。

私の歴史好きは、中学生のころからのことで、兄が使っていた高校生用の世界史の参考書で、「十字軍発生の原因はヨーロッパが香料を求めていたことにある」という説明を読み、偶然的事件の連なりだと思っていた歴史に「理由」があることを知ってショックを受けて以来のことだ。朝食を食べたかどうかまで忘れてしまうこともある私が、今でも、その時の部屋の情景や、参考書の裏表紙中央にあった出版社のマークや、表紙の半透明ビニール・カバーの質感まで鮮明に思い出せるのだから、余程の衝撃だったに違いない。

数学史研究の第一歩としては、当時は伝記もなく、全く手付かずだったオランダの数学者ブラウワーを調べることにした。直観主義的数学と呼ばれるブラウワーの数学の根底には、正法眼蔵の「有時」の世界観や、ベルグソンの世界観にも似た「二・一性」という思想がある。少しは、ものが分かるようになった今からみれば、これは、カント哲学の科学的簡易化に過ぎないとわかる。おそらく、真剣に研究すれば、当時の私にでも、すぐに底がみえたはずだから、やらなくて良かったと思うが、反科学的な傾向を少なからず持っていた私には、通常の数学の観点からは異様な、この思想が輝いてみえたのである。

そこで、学部時代に何度か講義を聞いたことがある数学史の村田全先生に、押しかけ弟子になりたいと手紙を書いた。が、返事がこない。大病で入院されていたのだ。村田先生は、「あの時、僕の弟子にならなくてよかったよ」と仰ってくださるが、先生の入院のことを知らない私はガッカリだった。

そうこうしている内に、当時、はやっていたトポス理論というものに自分の数学研究が応用できることがわかり、それが海外の著名な研究者にも評価され、なんとなく数学に戻ってしまい、その後、そのまま数学で学位をとって、さらには、計算機科学に転向して、二十数年、理工系の学部や研究所ばかりを転々としていた。それが、この4月から京大文学研究科の情報・史料学専修教授という、情報学の研究・研究が主ではあるものの、歴史

学も仕事の一部であるポジションにつくことになって、自分でも本当に驚いている。

実は学生時代には、歴史研究からすぐに離れたものの、岩波文庫のために、ゲーデルの不完全性定理論文を和訳して解説をつけるという仕事を引きうけたのがきっかけで、7、8年前から、ブラウワーの論敵だったドイツの数学者ヒルベルトの研究を始めていた。

ヒルベルトは、情報社会のアイコン的存在であるフォン・ノイマンの実質的な師であり、悪魔が夜に来てノイマンのために論文を書いているとまで言われた天才ノイマンが、「私は天才ではない。この世で私が知っている天才はヒルベルトだけだ」とまで言った人だ。ヒルベルトがノイマンに与えた影響は極めて大きい。

そのヒルベルトの遺稿を調べるために、私費でゲッチンゲン大学に調査旅行をして、数十万円かけて未発表の遺稿の一部を購入して来て分析するなどということをしていた私は、世紀の変わり目ころには、米国の著名な数学史家にも評価していただけるようになっていたのである。

ところが、この歴史研究のために調査したヒルベルトの十九世紀の数学論文がヒントとなって、論理学と学習理論の新しい関係が見つかり、しかも、それが、全く別個に推し進めていたソフトウェア工学のプロジェクトのブレークスルーともなるという、全く予想外のことが起きてしまったのである。この研究は色々な分野の方々から評価を頂き、海外にも共同研究者ができて、そういうテーマを放っておくわけにもいかず、結局、工学部の教員としては、本来の業務でない歴史研究に割く時間がゼロとなってしまった。情報系の研究はドンドン進んでうれしいものの、一方で歴史がやれないというフラストレーションがたまる一方という状況になっていたのである。

ちょうど、その頃、この情報・史料学のポジションを研究者公募情報ウェブサイトで見つけたのだから、最初に見たときには、本当に目を疑った。情報の専門家であることが主な条件で、しかも、歴史への情報技術の応用にも興味があることが副の条件という、私にピッタリの条件だったのである。キャリアを積んでいる情報をやりつつ、歴史もできる！こういう偶然があるものか、何かに騙されているのではないかと思って、何度も公募条件を読み直し、最後は、連れ合いにも確認してもらったほどである。

そのポジションについての現在、ようやく自分が本当にやりたかったことが何であるかが分かり、しかも、自分の最新の歴史と情報学の研究結果を講義できて、それを、また、学生の諸君が興味を持って聞き質問もしてくれるという、今まで経験したことがない、夢のような環境のもとで研究・教育を進めている。

この原稿を書いている今も、ヒルベルトの数学思想の源流が、極めて現代的な計算複雑度理論的な問題意識にある、という私の説を補強するエビデンスを、彼の日記の分析を通して割り出す作業を続けており、近い内に、従来知られているものとは、大きく違うヒルベルト像を提供できるだろうと思っている。

また、同時に、社会科学の方法論をソフトウェア工学に応用するという研究も進めている。これは、米英などでは、すでに古くからある研究で、ソフトウェア生産現場でも、す

で導入されている。私の場合は、米国の社会学者リッツアの著書を読んで、ソフトウェア工学と社会学の類似性に気がついたのが研究のきっかけだったが、科学技術政策関係の研究者と議論すると、社会科学的、特に社会学的な問題意識の欠落が日本の産業競争力低下の原因の大きな要因になっているという意見を良く耳にする。科学技術の社会学的な研究への期待は、理系研究者を中心として、日増しに大きくなっている。

それもあって、これを研究しているのだが、私は、これを、単なる社会工学的技術の研究としてではなく、ジョルジュ・フリードマンがテイラリズムに大きな関心を示したような観点からも研究してみたいと思っている。ヒルベルトと同時代のマックス・ウェーバーの合理性理論とヒルベルトの数学論を比較することにより、思想史的な観点から、情報技術の特殊性が見えてくるのではないだろうかと期待しているのである。

これらの研究に共通するのは、ウェーバーが知ろうとしたこと、つまり、近代とは何かという問いである。文学研究科の多くの同僚に比べれば、人文学的な素養に欠ける私がどこまでやれるかは分からない。しかし、自分自身が情報技術者として、自分が見据えたい、近代という装置の歯車の一つであるという点において、私は非常に特殊な存在なのではないかと思う。このことが、私の研究にプラスになるならば、何らかの貢献はできるだろう。しかし、それは、あるいはマイナスなのかもしれない。マイナスだったか、プラスだったか、その結論がでるのは十年、あるいは、二十年先のことだろう。